

メディアファイロソフィー

第七回 〈不寛容〉な日本

高田明典

今日ニホンが死んだ。もしかしたら昨日かも知れないが。六十二年前の今日——八月十五日に——。

その死は新たな誕生に向けての一つの契機であつたはずだし、多くの人々がそれを感じてきたのだが、二〇〇七年の今日の状況はあまり芳しくないようだ。死を悼むあまりに故人の復活を望むかのごとく、時計の針をおよそ七十年分も戻そうとしている人たちが多く存在している。もちろんそれが私たちの総意に基づくものなのであれば、それにしたがうのにやぶさかではない。しかし「戦後レジームからの脱却^二」という主張——これは「時計の針を戻す」という意味だ——が「民意」によつて否定された^三直後であるにも関わらず、この国の真夏の景色はあまり変わらない。この「大敗」でもまだ足りないことだろう——六十二年前のあの「大敗」^四でも足りなかつたのだから、選挙で負けたぐらいではへこたれないということか。

もちろん「戦後レジームからの脱却」という文言においては、その「脱却」の方向性は明確にされていない。「新しい体制」へと移行するのも、「古い体制」に戻るのも、どちらも「脱却」ではあるが、この政権の脱却の方向は、明らかに過去を向いている。逆風を自覚しつつも、言い訳程度に閣僚一名^五を靖国参拝させてお茶を濁すという姑息な手段をとるのが、この政権である。それが意味するのは、この国には「旧体制^六 アンシャン・レジーム」に戻ろうとする大きな力が存在しているという事実である。また、その「力」は選挙で大敗したぐらいでは弱まることはないという恐ろしい事実である——民意とは別のところに存在する「力」が、二〇〇七年現在にも、この国には厳然として残存しているかのようなのだ。

一 カミュ『異邦人』冒頭による。「きょう、ママンが死んだ。もしかすると、昨日かも知れないが、私にはわからない。養老院から連絡をもらった。」

二 二〇〇七年当時の首相、安倍晋三の掲げたスローガンの一つ。

三 二〇〇七年の参議院選挙で、自民党は大敗した。

四 一九四五年の終戦のこと。

五 高市早苗沖縄北方担当大臣（役職は二〇〇七年当時）だけが参拝した。

六 ancien régime 「旧体制・旧制度」。特に、フランス革命以前の、王を中心とした政治体制を指す。全然関係ないが、「アンシャンレジーム」という名前の競走馬がいるらしい。どういふ「意味」なんだろう。なんだか怖い。

同様の景色は国会議事堂の周辺だけではなく、私たちの周囲にも薄く広く存在している。むしろこのほうが重要な問題である。その景色の成分は「独善」と「不寛容」である。実はこの二つは同じものの別の名前であり、また、およそ七十年前のこの国の空気の主成分の名前である——私は、一九三六年に建造されたあの議事堂の屋根がこの成分の収集精製機なのではないかと疑っているのだが。

「独善」の表現形を見ることができるのは「不寛容」においてである。特に、異邦人への不寛容な態度にそれは如実に表れる。もちろんここで「異邦人」エトランジェ」という語を敢えて使っている——単に国籍や文化的な背景が日本以外のものであるということにとどまらない意味を持つものとして——。

ある文化圏に生育すると、その文化的価値観に照合して異質なものが気になることがある。アメリカ人の自己主張の強さに辟易とし、大阪人の傍若無人さに嫌悪感を持つ。駅のホームで整列乗車できない人たちを理解できないと感じるし、「謝ったら、しまいや」という言葉にも、「謝ったら負け」という考えにも、違和感を感じる。しかし、同様に「とりあえず謝る」という東京的な感覚に違和感を感じる人も少なくないはずだ。そういう感覚自体が問題なのではない。その「異質さ」をどう考えるかということが重要だ。

横綱朝青龍が、薄弱な理由で地方巡業を欠席したというかどで、相撲協会から謹慎や出場停止などの処分を受けたという。まあそれはそんなものなのだろうと思つて午後のワイドショーを眺めていたのだが、どうも変な雰囲気だ。処分が出され、本人もそれに従っているという状態であるのだから、それ以上の何が問題なのだろうと感ずるのだが、なにやら毎日これについて報じられている。この横綱が「外国人」もしくは「異邦人」異質なるもの」と感じられていることが問題の根にあると思われるものの、詳細はさっぱり理解できない。簡単に言うと、この「問題」について論じている人たちが、何がしたいのか、どうなつてほしいと考えているのかが、よく理解できないということだ。「とりあえず記者会見するべき」とか「説明するべき」とか、果ては、品格がどうの、帰化していないからどうの、モンゴルで事業をしているからどうのこの——で、どうしろつて言いたいのか？

ある人間に対して何らかの役割演技を求めるのは、比較的よく行われることである。「社会人らしく」「学生らしく」「男らしく」「女らしく」——さらには「横綱らしく」

七一九三六年二月一日、「天皇機関説」を提唱した美濃部達吉が右翼に襲撃される。また、二月二十六日、二・二六事件が発生し、その後、七月十六日までの間、東京市に戒厳令が敷かれる。

八つまり、同じ国に生まれ育つたとしても、私たちは必ず誰かに対しては「異邦人」であるということ。そればかりではなく、普段は価値観を共有していると感ぜられる友人や同僚であつても、ときにそこに異質なものを見ることは、ままあること。

「外国人らしく」。実は狡猾な人間であればあるほど、「らしく」振舞う^九。そのほうが社会においてうまくやっているとよく知っているからだ。そして、役割をうまく演じられない、もしくは演じない人たちを排除したり、また、役割演技を高圧的に強要したりする者もいる^{一〇}。もちろんこの世界においては、誰もが何らかの役割を自覚し、それを演じることによって生きていく。しかしそれは、誰かに強要されるものではなく、自分で選びとるものである。

レヴィナスは「他者の了解不可能性」という概念を提示する^{一一}。私たちは、人と出会ったとき、その人が「誰であるか」「何者であるか」を知ろうとする。しかしそれは、「私の認識の枠内に、その人を位置づけようとする営み」である。たとえば私は、「ああ、あのクラスの学生だ」もしくは「同僚だ」「知らない人だ」などと人々を位置づけて認識する。しかしそれはその人の一つの側面でしかなく、また、その人の一側面に属する何かを、私が想定する役割にあてはめて得られたものでしかない。「他性」他者であるという性質」とは、そのような方法で捕捉されるものではない。もしも他者を「了解した」とするなら、その瞬間にそれは「他なるもの」他者」ではなく、「私が認識した対象」となるからである^{一二}。私によってとりこまれたそれは、もはや「他なるもの」ではなく、私の認識の一部となる。

「独善」と対をなす概念は、「他性の覚知」であり、「他者の了解不可能性を知ること」である。私たちは、自分が正しいか否か、もしくは、他人が正しいか否か、などという対立を超えて、自分以外のすべての人間が——ときに、自分自身の身体でさえ——「決定的に了解不可能な他者」であるということを知らねばならない。

「了解不可能な他者」の存在を認めることに居住まいの悪さを感じることはままあることだろう。しかし他者の存在こそが、私の存在を底で支えている。他者がいなく

九 「狡猾」ではなくても、そのように振舞っているはず。

一〇 高圧的に強要するのではなく、相手が自然と役割演技を行うように誘導するというのは詐欺師がよく使う手口である。この考え方は「他者配役理論 (altercasting theory)」と呼ばれる。たとえば、イカサマ賭け将棋の詐欺師は、自分がそれほど優秀ではなく、下手な手口で相手(多くの場合「サクラ」)を騙そうとしているように演じる。それによって「カモ」とされる人は、「自分はイカサマを見抜いた優秀な人間である」という役割を演じるように誘導される。つまり「カモ」られる、ということ。

一一 レヴィナス (Levinas, Emmanuel)。

一二 レヴィナス他者論の中核的な考え方である。さらには、レヴィナスの思想の中核に位置する概念であるとも言える。

一三 「私が認識する」とは、「私」とのあいだにいかなる関係を有するかという観点から、その関係性の中にその人を位置づけることである。つまり、「私に何かを教えてくれる人」であったり、「私を養育してくれる人」であったり、「私を非難する人」であったり、と認識する。

れば、「私」は存在しえない。単純なたとえで言えば、「黒だけの世界には、黒という概念は発生しない」ということである。黒は、白という対立概念が存在して初めて成立する。同様に、「私」という概念は、「他者」が存在するときに限り、成立する。そしてそのとき、他者とは、決して「私」によっては捕捉されえない「他性^{一四}」を持つものでなければならぬ。「他者の了解不可能性」とは、私が私として存在するために不可欠な概念である。

寛容とは、「他者の了解不可能性の覚知」である。私たちが寛容であるとき、譲歩、妥協、和解、などという概念は、なりを潜める。ドゥルーズ^{一五}は『批評と臨床』において、「他者」に対抗するための、外部における闘い^{一六}対抗する闘い」と「自己」の内部における闘い^{一七}あいだにおける闘い」とを区別しつつ、以下のように指摘する。

「あいだにおける闘いとは、他の様々な力を捕らえ、ある新しい集合の中、ある生成の中で、それらにみずからを結びつけることによって、一つの力がおのれを豊かにしていくプロセスなのである。^{一八}」譲歩でも妥協でも和解でもなく、異なる主張を持つ二人の人間のそれぞれの内部で、とりあえず最適な解に到達するまで意思の伝達と思考が展開され、その双方が新しい何かになっていく。それを可能にするのが「寛容」である。

寛容とは、お目こぼしすることでも、見逃すことでも、とがめだてしないことでもない。また、寛容とは「ある人間が、自分が想定する枠組みを外れた行為をしたときにそれを許容すること」でもない。そうではなく、「ある人間の行動や思考に関しての、自分の認識枠組みの正当性を常に疑う」ということである。それは、「絶対的に正しい人間は、この世界には一人も存在しない」ということを思い出すだけで十分理解できるはずである。

しかし一方で、独善と不寛容は大きな魅力と力を持っている。なぜなら独善は一見効率的だからだ。相手の主張を吟味することなく、自分の主張の正当性をやみくもに信じているとき、その人間の内部においては、いかなる対立も、衝突も、摩擦も、発生しない。それらは単に外部における騒音であり、独善者の内部は静謐そのものである。

^{一四} 「他」であるという性質。つまり「自」ではなく、また、「自」にとりこまれえないもの。したがってこの文は、同義語反復でもある。

^{一五} ジル・ドゥルーズ (Deleuze, Gilles)。

^{一六} ジル・ドゥルーズ(著) 守中高明・谷昌親・鈴木雅大(訳)『批評と臨床』河出書房新社、二〇〇二、二六二頁―二六三頁。この「あいだにおける闘い」という考え方は少々面倒である。相手の立場や、相手が持っている力、相手が抱いている悲しみ、などのすべてを、自分の中に再生産することを通して、自らを変化することを指す。それに対して「対抗する闘い」とは、単に相手を拒否し、遠ざけ、それがあたかも存在していなかったかのようにするための「闘い」を言う。

るはずだ。したがって、人は、簡単に力を得ようとするとき、不寛容に傾斜する^{一七}。王や政権担当者や指導者が「不寛容」になるのは、そのときである。

不寛容は伝染し伝播する。不寛容な人間と接し、摩擦や軋轢を経験すると、その力に魅了され、人は少し不寛容になる^{一八}。そして不寛容の種は、いたるところに蒔かれている。

教育実践における「ゼロ・トレランス(zero tolerance)」を「寛容度ゼロ」「不寛容」と訳すのは誤訳である。これは、「許容度ゼロ」もしくは「お目こぼし無し」と訳すのが正しい。「寛容さ」は、数値で表現される概念ではない。数値(つまりこの場合はゼロ)を以て表現されうる「トレランス」とは「許容誤差」のことである。それは、提出期限を一日でも遅れたら受け取らないということであり、最初に提示した目標得点を一点でも下回れば補習を受けさせるということである。したがってそれは、本来、「独善」とも「不寛容」ともまったく関係がなく、教育実践における技術的方策の一つでしかない。これを「不寛容に基づく教育」として称揚することは論外であるが、同じ理由で非難するのは的を外している。ゼロ・トレランス教育によって、教師が力を持つようになると思えるのは間違いであり、むしろ教師の裁量権は小さくなる^{一九}。問題は、これを誤解して、教育の場所に「不寛容」の種を植えてしまうことにある。

一方、行政官僚は、自らの権限を確保・拡大するために、「行政裁量」の範囲を広くとる法案を作成することが少なくない。つまり、「法的に正しいお目こぼし」を可能とするような法律を作るということである。それによって、「お目こぼし」する側の人間は「裁量権」という名前の権力を持つ。なぜなら、お目こぼしとは、その個人の恣意的な判断によって行うことができる行為であり、私たち「下々の者」は彼らに対して伏してお目こぼしをお願いすることになるからである。つまり、「原則として不寛容」

^{一七} 不寛容である、相手を否定し拒絶することが簡単になる。それが自分の信念に基づくものであってもそうだが、さらにそれが法や慣習、ある社会における価値基準に照らしてのものであるとき、その不寛容さは社会によって裏打ちされるので、より強力になる。社会規範は重要なことであるが、「虎の威を借る狐」のように、社会規範を振りかざしている人の中には、単に「自分のものではない権力」を行使することに快楽を見出している人も少なくない。現代では、それが、力の無い者が権力を行使するための唯一の手段でもあるからな。

^{一八} 不寛容な人に出会うと、不寛容になったらさぞかし気持ちがいいのだろうか、と感じる心性に由来するのだらう。

^{一九} この後に述べているように、裁量権が小さくなれば、権力を行使できる可能性も小さくなる。教師というのは(私もそうだが)学校という場所においては明確に権力者であるので、その権力関係を小さくしようという意図のもとに「ゼロ・トレランス」が行われるのであれば、それはまた別の問題であるが、基本的には好ましい方向であると感ずる。権力なんて、持たされてもいいことは何もないからね。面倒なだけ。ただし、権力は義務および責任とセットなので、権力が無くなれば、義務も責任も無くなって、個人的にはとても楽になるだらうなと思う。

であることが、役人に力を与えている。だから役所から帰って来た人は、誰もが少し不寛容になっている。

渡辺一夫は『寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容になるべきか』^{二〇}と題された評論において、以下のように指摘する^{二一}。「従って、寛容は不寛容に対する時、常に無力であり、敗れ去るものであるが、それはあたかもジャングルの中で人間が猛獣に喰われるのと同じことかも知れない。三二」

文明を離れたとき、人は猛獣の餌食となる。私たちは、「力」としての文明や社会を手放すことができないのと同じ意味において、寛容を放棄することはできない。なぜなら社会の基礎をなす絆や連帯は、寛容があつてはじめて形成されるものであるからだ。不寛容な人間たちが集まっても、そこに絆や連帯が形成されることはない。不寛容とはこの社会をジャングルへと変化させる行為である。

しかし私たちは孤独に生きているとき、とても弱い。孤独でありつつも強くあろうとするとき、不寛容を武器として使うようになる。そのとき人は「猛獣」になる——孤独な王が不寛容な独裁者になるのは、したがって、当然の帰結であるともいえる。

この猛獣の牙は大きければ大きいほど強く、過去においては「正義」や「国家」や「神」という名前を持つに至ったこともある。そして多くの孤独な人間は、その牙を自分のものとし、より強力な猛獣となっていく。

その牙は、そばで生きる者たちを肩身の狭い状態へと追い込む。そこでは人々は、不寛容の餌食とならないように、他人から指弾されないように、息を殺し、毎日怯えながら細心の注意を払って「役割演技」の中で生きていくようになる。いかにして自分の「日本人らしく」「愛国者らしく」「軍人らしく」「銃後の母らしく」見えるかに極度の注意を払うようになる——およそ七十年前のニホンの景色であり、渡辺一夫の言うところの「ジャングル」だ。ジャングルの中で「不寛容」という牙を持つ猛獣に殺されないようにするためには、自らが猛獣となるか、もしくは暗い穴の中で息を潜めて生きていくほかはない。それを想像するだけで息苦しくなる。この不寛容の回路がいったん起動されると、それを寛容によって止めることはとても難しくなる。

そして、二〇〇七年の日本にもその景色の一部が見え隠れするようになりつつある。私たちはもう一度死のうとしているのかもしれない。そうならないために、不寛容の

二〇 ここでは扱わないが、寛容が、不寛容に対しても「寛容」であるなら、おそらく「寛容」は普及しないし、結局この世界には不寛容が蔓延することになりかねない。しかし、「寛容」が「不寛容であること」に対して不寛容になるというのは、自己矛盾となってしまう。

二一 『狂気について—渡辺一夫評論選』 岩波文庫、一九九三。

二二 つまり、「不寛容な人たち」に寛容をもって接しても、それは伝播しないということ。

小さな芽を——牙にならないうちに——一つ一つ丹念に指摘していかなくてはならない。そしてそれを多くの寛容で包み込み、不寛容が拡散しないようにしていく必要がある——もう間に合わないのかも知れないが。

時計の針を七十年分戻そうとしているのは、この日本のどこかに住んでいる悪人の集団ではない。その主力は、午後のワイドショーを見て朝青龍を指弾する人たちであり、きちんと吟味することなく「ゼロ・トレランス教育」を推進しようとする人たちであり、国旗掲揚に起立しない人間を非難する人たちであり、「愛国心」という概念を「牙」として使う人たちである。

この私に残された望みは、多くの人々が、指弾することも、非難することも、憎悪の叫びをあげることもなく、彼らの孤独を知り、それを寛容さを以て迎えることである。^{二三}

(初出 『文學界』二〇〇七年十月号)

^{二三} カミュ『異邦人』末尾による。「一切がはたされ、私がより孤独でないことを感じるために、この私に残された望みとっては、私の処刑の日に大勢の見物人が集まり、憎悪の叫びをあげて、私を迎えることだけだった。」